

佛陀時代の研究に關する階級・身分の考察

升 上 卓 俊

仏陀在世當時の一般社会的狀態を知る爲に制度、組織の面からの考察を必要とするが、今此處では、當時印度民衆個々の地位に關して、四姓制度に依る印度の制約された分立的封鎖的社会より階級、身分の問題を考察して行く。

(一)

個人や家族の身分の問題は依然として印度社会の特異性に指摘される。印度教がもつ実践的行動に於ける嚴格な慣習と、強制が當時に於いて支配力を有し、印度社会の基礎をなしていることは周知である。謂はゞ、その争を通じて、独特の宗教的社會制度を呈し、そこに階級性といふものの規定が為される争を認めざるを得ない。

印度人は古く時代より、アーリヤン人と非アーリヤン人とを區別して、對比せしめて考えて

いたが、この考へ方は紀元前五、六世紀以後もなほ存在して、上層階級をアーリヤンと呼んだのである。かつてパンゲヤー地方に侵入したアーリヤン人が、その土地の先住民と戦つて捕虜となつたが、それら捕虜となつた先住民を奴隷として使用した事は、言語的に、先住民を、*dhase* と呼んだのか、後に、*dhase* と言ふ語が奴隷を意味するようになった事を知る時、階級性の問題は制度以外からも本質的に階級性の意識をもっているものであつて、印度に於いては、階級性の本質的要因と制度と言ふ関連が、混全一体となつて現れて来ると言ふ事を知る事が出来る。

階級性、身分の問題を大別するならば、当然支配者の存在と被支配者の立場になるが、カーストが、ツント等の望むる職業団体と対比して、根本的に異つて居る時、又社会的順位と関連するものとなつて、そこに身分、階級と一定利害関係から経済的地位を導くする「集合体」を意味して来る。物財或は一定の労働資格を有するか否か、そこに階級地位を決定して来るし、身分は、ある種の社会的名譽或は不名誉を意味して、重宝の置き処に従つて内容と一杯ではなく、一定生活態度によつて規定される。又表現されて居るのである。社会的名譽は一定階級地位と密接な繋りをもつもので、何らかの形で身分所屬等の平均的地位に制約されるが、然し、身分に相應する処の生活を確保する為には、一定の財物の所有するものと、しないもののこの業務が必要である。その條件を具備する事に於て集合がなされるのであるから、一定身分への所屬は、自身階級的地位を左右すると言ふ事が可能である。身分は血統的であり閉鎖的でもあるが、そこに公開的意義も有して来る。印度のカーストも疑いなく閉鎖的身分の一種を具えるのであるが、この事は印度に限る事なく、西洋に於ける貴族階級に於ても差別待遇をもち

、アメリカに於いて見られ得る白人対黒人、或は混血児等の間にも存在してゐる事である。種
婚と云う事がこゝで問題であるが、社会的迫害はもとより、法律的に全く禁ぜられてゐるし、
ヒンヅト、カーストの場合には、カースト間は勿論、支分カースト間にも直婚は厳禁されてい
るし、カースト的混血児は両親のいづれよりも低いカーストに編入され、如何なる社会にも街
生カーストには入り得なかつた。又、カーストが直婚問題について身分的に極端にまで激しく行
はれたと言ふ事は、侵入民族の戦士によつて、被征服者の女性を服従せしめた事より始まり、
後に経済的に一夫多妻なる制度を行つた上級階級の男子の被害は夷らないが、その結果、女子
の婚姻範囲が広くなるに従い、相手が同一カースト者に限られるが、独占的立場には止まらず
、下級カースト女子との競争と、特に需要の増大するものに於ては、一妻多夫の風すら生じた
、反面には貧乏人の間には常に娘の需要なく恥として嫁殺しが行われると言ふ事等⁽³⁾、身分問題
に起る悲劇を抱いてゐた様であつた。

(三)

斯くの如き身分階級の内的必然性に見られる考察から、次に印度の一般的制度よりする考察
に及んで行くと、部落的社會集團が發生して、國家的形成期に歩みを進める所謂、仏陀時代に
は、社会的に、又科学的知識を有するものゝ支配的地位を得るやうになるが、封建性確立の爲
に必要とす力、資本主義國家確立の爲の富豪が絶対條件である如く、知識所有者は文的絶大な

る貢獻をする存在で印度に於いて、教長を有する者の、存在的価値は耐へず最高の地位をもつていた。物質的ものは最下位に置かれ、一般に見られる封建國家、資本主義國家の人間像とは大いに異つて、思想家に対する尊敬は必ず優先されてゐた。故に家柄に対する尊敬の念は本能的習慣に於いて根強く、僧侶、武士、庶民と職業が專門的に発展する一方、それらの溝を隔り無批判の内に封建性を強くして、シヤイナ、仏陀に依る新しい時代の転換契機をとらうのであるが、然し容易に社会の制度、組織、身分の平等等は改革されてしまふ事は出来なかつた。婆羅門には絶対組織力として王族、大家からの扶養が要請され、供物に依つて彼等の生活を支えたが、兩代の交遷は一族の増加であり、同事に生活経済は一族の扶養を常に可能とせず、婆羅門の内部分裂を止むなかつた。依然として尊敬の念を保つたとは言へ、そこに精神労働者としての神祇に過ぎず、新しく社会の第一階級にらんとしていた刹帝利階級のもとに職を求めて、一般大家に依つて王庭に入り、才能に依り上級を勤めもの、或は才能のなきものに従業、商業、工業に従事すると言ふ時代的流れに運命化したものである。刹帝利刹帝利族の掌中に流れながら、彼等の社会的地位は征服に依る者か、協約に依るものでその支持は、政治的利害に依つて決定的上層階級、身分をもち得ると一概に云えなかつても、婆羅門と共にその地位をしめた。吠舍、首陀羅階級に於いては、マヌの法典に依る職業的規定があるが、總て勤勞階級と言えなかつても詳細に渡ればあるが、前三階級に対する義務は行はれなければならぬ。吠舍階級は一般に對して有産階級としての特権性を有し、地位的には第三階級とされ、アトリアン族である誇りで区別があつた。實際的に移大の資本と土地を有し、支配階級との關係を密に、利害を共にしてゐると同事に、勤勞階級を置いてその基礎の上に組織をもち、組合の確立は決定的事實の上に

支配力をもつものであつた。昔種羅は吠陀を労働する再生族、その子孫。職業よりする規定等（マヌ法典、二、一六八。十、九二九八等）謂はゞ職業的に混全一体としての性格の、第四階級としての地位をもち、前述吠陀階級の勤勞的に対する奉仕的職業に於いて、異りをもつていた。斯くの如き差別は、一概にして仏陀時代に至りても消滅してしまわず、民族的特性は動かされなかつた。下等階級とされる奴隸に於いては、生産に労働する事は勿論、上等階級の富に溺れた主人に便えて、他人の家庭的雜用に從事させ、精神的身体的仕事に労働する時面を節約した事が考へられる。

以上階級性の問題、身分的地位の職業的規定が濃厚に印度人に根強く、時面的表裏は諸契約の交換期を迎へても容易に改革されてしまふことなく、仏陀入滅後に於いて「仏陀は慈悲を説くべき如何なる権利を有してゐたか、彼は刹帝利として生れ、その階級の義務として武器を把り、戦場に備へべきであつた」と言ふ見解を、クマールラ・バツタと言ふ勇將が批判し、見解を明らかにしてゐることは、十分制度の根強く施行された事實を物語るものである。仏陀が出世て、彼の修道の勤行は當支那一、一四五—中阿含乘歌經—を中心と考察しても、明らかに人主の意裁、本質への問であるが、そこに仏陀の尸史家が認識され、尸史的沉位に対する解釈或は能度が必然的に關係してゐる。仏陀の本質的面に尸史的沉位から固く直す私の企てであるが、印度人に欠如された批判的考察、これに対する仏陀の批判的精神、すべて當時の社会的状態が必然的に仏陀を生んだと云ふ事が考へられ、当時身分的に階級的に何ら不自由を感じないゴータマが家を出、家なきものとなつて山野を苦行する仏陀の態度の中に、印度人の無批判的、態度と尋羅門の階制に依る極端な不自由階級が、暗余の生涯を度ぐる不必要性を自らに問ひ、

印度教に対する批判へも転展する当時の社会状態は、仏陀批判精神とその教説に影響されて行く事を知る事が出来る。

註

(1) (2) 大伴紀元前二千五頃、アーリヤン民族が恒河地方に移住してドラヴィダ以下の諸民族と闘争を交えて、そこに平和的關係を樹立されたが、そこで社会制度確立と共に、アーリヤン人と非アーリヤンとの文化的優秀な能力が、アーリヤン人の方に圧倒的であり、従つて社会的地位もより高いものでは満足せず、両者の間にそのやうな思想が区別される様になつていた。

(3)

マックス・ウェーバー、世界宗教の經濟倫理、Ⅱ、杉浦宏弘、中村元補註、一〇二頁参照